

共産主義優等生からいわゆる「国家の敵」東ドイツでのマイク・ミシェルの生活とその後

マイク・ミシェルは 1966 年ベルリンに生まれ、ベルリン・クーペニック地区で学生時代を過ごす。学生、教師からは FDJ(自由ドイツ青年団)におけるリーダーとして見られていた。10 年生の時、アビテュアを選び、だんだんとその偏狭なシステムに疑問を持ち始める。学校を退学し、パンク仲間とつるむようになる。1985 年 8 月 13 日、アレクサンダープラッツにて逮捕され、数か月に渡りシュタージの尋問を受けることとなる。1 年と 3 か月の刑期。

どうしてシュタージ刑務所に入るようになったか、そしてその意味、どうやって壁崩壊前に西ドイツへ移住することができたのか、8 月のベルリン滞在中に私たちに語ってくれました。

① 「あなた方は未来の指導者」

PL : 逮捕される前のあなたの生活はどのようなものでしたか？東ドイツに対する意見はどんなものでしたか？

MM : 私は共産主義のもとで育ってきました。それは学校での教育前提でした。母は反対に全く政治に興味のない人で、いつもどこかのパンがおいしいだとか、どの歌がいいだとかいうようなことをしゃべっていました。そういう家庭で 12 歳のときには共産優等生と言われていました。理想主義の塊のような子でした。

15 歳のとき、東ドイツスポーツと技術クラブのメンバーとなり、FDJ(自由ドイツ青年団)のリーダーとなりました。だから私はクラスで「赤いくつした」と呼ばれていました。

10 年生の最後にクラスから 2 人だけ優秀な生徒がギムナジウム進学許可の決定がありました。私は小さい工場で働きたかったので、私もアビテュアを選びました。私達は「未来の指導者」として教育されるべきだったのです。

② 「酔いが覚める」

PL : そのような状況で、どうして逮捕されるに至ったのか理解できないのですが。

MM : ギムナジウムでの最初の頃はまだ学校やシステムに批判的でした。矛盾、批判など多くのことを自分で考え始めました。そのうちいくつかは今でもはっきり覚えています。1983 年の 9 月、韓国の旅客機がカムチャッカ上空、ソビエトの航空領域で撃墜され、ソビエトの是非が問われました。私は当時の担任の先生を尊敬していました。その頃、教室で彼女は西ドイツのテレビで撃墜はソビエトの責任で、それは嘘と「敵対的プロパガンダ」とであると教えてくれました。

1 週間後その通りにソビエトが旅客機を撃墜したと認めました。先生はまた教壇に立ち、「私たちはやっぱり旅客機を撃墜していた」と言いました。私は先生が「圧力により」意見を変えざるを得ない様子を目撃したのです。そして私は「私には絶対させない」と思いました。他にも私がひどく扱われていると感じたり、先生に対して反論のチャンスが与えられていないと思っていました。このことは当時かなり私を激怒させ、精神的に学校から距離をおかせることになりました。

同時期、パンク仲間とつるむようになり、家庭では居間のシャンデリアを購入するかどうかの方がずっと子供の将来より重要な、、政治的に面白くない場所となっていました。

私は学校で内密に環境保護についてのビラを配ったりしはじめました。シュタージは学校に来て、学生たちにビラの出どころなどについて質問したりしていました。どこからそんなことを知ってシュタージが学校へ来たのか、驚いたことを覚えています。

そして、「環境を考える東ドイツ国民は非国民か？」と考えるようになりました。このことから、国家安全という側面をもちながら、「緑」の思想を広げることが問題となるこの国はどこか違うのではないかと思いました。このようなことがあり、私は学校を辞め、家を出ることにしました。

③ 「再誕生」 「もし雨が降っていたなら、全く違う状況になっていただろう」

PL：そしてそれからどうになりましたか。

MM：私が学校を去った時、汚れが落ちて、新しく生まれ変わったような気持ちになりました。その頃、パンクやレズ、ホモの仲間達とアンダーグラウンドで行動していました。翌2.3か月は休暇のようなものでした。自由の喜びと、あの頃先生言っていた人生というものと知り合える期待で複雑な気持ちでした。

この頃、私はジェニー・ブーフという女の子と知り合いました。まず良い友達になり、一緒に住むようになりました。ジェニーはどうしても西側へ行きたいと言って、知り合う以前に出国許可の申請を済ませていました。それでもその頃申請が正式受理されるまで、2.3年はかかっていました。そんなに長く待ちたくないと言っていました。それで壁作りが始まる8月13日、公共の道路で挑発を決行し、逮捕されたのです。もし西側国に政治難民として買ってもらえれば、早く出国できる可能性があったからです。

8月13日のその日、ジェニーは私に付き添う気があるか聞いてきました。私は東ドイツを去りたいという気はさらさらなく、それでもその日、天気は良かったし、一日中アパートで過ごす気がしなかったので、一緒に行くことにしました。

ジェニーは言いました。「やりたかったら一緒にしたらいいよ、でもそれはあなたが決めて」

④ 行動

MM：私たちはプランツラウアーベルクの道に立ちました。ジェニーは顔を白く化粧し、まるでSEDの政党新聞「Neues Deutschland」を読んでいるかのようにふるまいました。そして、おもむろにタイトル部分「Neues Deutschland」を切り取り、静かに頭の上にかざしました。

勇気、頑固、疑惑と怒りの入り混じったような気持ちで、私は叫んでいました。「そう、これこそ必要だ。新しい国、人、壁がもう必要ないように」

歴史的に壁を必要とした、その理由も理解できるのですが、もし80年代中頃、西と東が平和的共存をし、東ドイツ市民に2.3週間、親戚を訪ねたり、エッフェル塔見学のためのビザを発行することもできたはずです。私は東ドイツのリフォームが欲しかったのです。

この行動の後、私としては世界を救ったような、あのころ学校でビールを配った時のような気持ちでした。私は他の人のように、黙りこんだりはしませんでした。それでも通りすぎる人は誰も足を止めることはなかったし、警察さえもジェニーを逮捕しに来ることはありませんでした。

私達はアレクサンダープラッツの駅に向かいました。また同じように行動し、今度は全く押し黙ることにしました。約100人くらいでしょうか、立ち止まり、見ていました。私は沢山の人たちが、ディスカッションをしに来るだろうと期待していました。あの頃とてもナイーブだったのです。

ところが、たったひとつディスカッションも始まる前に警察が来て、ジェニーと私は「事情聴取」としてケイベルシュトラッセの市民警察へ連行されてしまいました。聴衆の中の一人が、「勇気をたたえよう！」と言い、拍手が起こりました。

この時点では私は2時間くらいで家に帰れるだろうと踏んでいました。ひどくなるとは想像していませんでした。

一日と一晩、尋問を受け、逮捕状がでて、シュタージ塔の2階へ移送されました。ここでも1週間程度の拘束で、反省と社会奉仕程度だろうと考えていました。しかしそれは結局3か月にも及ぶこととなりました。このパンコーの刑務所にいる間、私は毎日2.3回の尋問を受けていました。

⑤ 尋問とシュタージ拘束の生活 「西側に溶け込むのは難しい」

PL：その頃、尋問されることをどのように思っていましたか？どんな気持ちでしたか？

MM：すべてに対して、無理解と怒りを感じていました。どうして自国民を閉じ込められるか理解できませんでした。私はパンクではあったけれども、国家の敵ではない！シュタージはもちろん政治の根本についてや私が行動をした動機などについて全く興味がありませんでした。彼らはその件を早く処理したく、そして尋問の間中、どうにか有罪にするための理由を探しているようにしか見えませんでした。

判決というのはとどのつまり、私が彼女の合法的出国許可を手伝い、私の逮捕により、警察が「規律管理」を乱されたというものです。私の逮捕理由は要するに、私の逮捕であったのです。

PL： 刑務所の状態というものはどんな様子でしたか？

MM： 収監中ホーエンシューンハウゼンにいました。ここは私が他に知っている刑務所と比べて、良かったといえます。そこでは2人用の部屋にいました。他の部屋に暖房の管を使って、モーゼル信号を送ったりしているのが見つかると、1週間は独房で過ごさねばなりませんでした。

一度ホーエンシューンハウゼンにいるとき、おかしなことがありました。今でも不可解なことです。私は呼び出され、刑務官のところへ連れていかれました。彼は、「この生活はどう？何か希望することはある？」と聞きました。初め、私は冗談かと思いました。それから、彼は真剣であることがわかり、「ジェニーにもう一度会いたい」と答えました。私たちは逮捕後一度も様子を聞くことがなかったからです。彼はそのように計らっておくと言いました。数日後また刑務官に呼び出され、彼の椅子に座っているジェニーに会いました。私達は監視下で長い間話すことができたのです。

PL： それでどのように壁崩壊前に西側へ出国することになったのでしょうか。

MM： ホーエンシューンハウゼンと他の東ベルリンの刑務所での刑期のあと、コットブスの刑務所へ移されました。ここでまた、西ドイツは東ドイツの犯罪人を買っている、と聞きました。多くの犯罪人が西側を買われるため、東ドイツ出国を申請していました。私も前科者では東ドイツで未来がないとわかっていました。ですから、私もアドバイスに従い、申請書を刑務所のシュータージポストへ放り込みました。

2か月後にはすぐ呼びだされ、荷物を詰めることになりました。後にシュータージ資料を見たところによると、近辺に疑わしいものがない、と記されていました。たぶん私のおじさんが西側にいて、CDUとつながりがあったため、こんなに早く受領されたのかもしれない。

PL： 西側への出国はどんなものでしたか？「コミュニケーション」は権力である」

MM： 西側を買われた罪人たちはバスでギーセンの西ドイツ受け入れセンターに連れていかれました。国境を超えたとき、バスの運転手が「ようこそ西ドイツへ」とアナウンスし、言葉に言えないほど解き放たれたような気がしました。それから、これからどうしようか考えました。西ドイツにはおじさんしか知り合いがいなかったのです。

PL： そしてどうなりましたか。

MM： 受け入れセンターでどこに住みたいか聞かれました。私はどうしても職業訓練がしたい、東ドイツ時代に西ではハードでないとやっていけないと聞いていたからです。橋の下へ住んだり、うまくいかないかもしれないという不安がよぎりました。私は一番職業訓練所の多いバーデンヴルテンブルク、バイリンゲンの難民受入れ所へ送られました。そこで、写真現像の技術を学びました。

PL： どんなふうに訓練所に受け入れてもらいましたか。

MM： 私が職安で東から来たというと、担当職員が隣の部署まで「オッシーが来た！」と叫びました。みんな押し寄せてきて私の話を聞きたがりました。西側が政治犯を買っているということを聞いて、みんなびっくりしていました。歓迎のしるしと言って彼らは50マルクをくれ、サポートを約束してくれました。

そしてアドバイスとして、「ミシェルズさん、職業訓練が始まったら、すぐにみんなに東ドイツから来たと言わない方がいい。先入観のある人がいるから」

本当にそうでした。シュパービッシュアルプの人達はベルリンの人達と違って、とても保守的でした。私は生まれ故郷を言った途端に、「共産主義者」でした。もし私が、「シベリアの後ろ側から来たにも関わらず」読み書きできます」というと、すぐにポイントを稼ぐことができました。(ジョーク！)しかし、多くの人達は快く受け入れてくれ、同情してくれる人もいました。

PL： 西ドイツにすぐ慣れましたか。

MM： 本当にすぐ慣れました。人々はすごく親切だったのだけれども、東ドイツ人とはかなり精神的構造が違っていました。初めは本当にティンブクツにいるほどの気持ちでした。オッシー(東側の人)が物自体に興味を持つのに対して、ヴェッシー(西側の人)はすぐ値段を見ます。これはかなり金銭的に映りました。

また東ドイツでは自分自身の興味は公共の興味より下に位置するべきであると教育されてきました。西ではひとつだけ許されます。これは「一番強いものが生き残る」ルールがあるからです。私達東ドイツ人と西ドイツ人の会話はよく平行線をたどりま。きちんと理解ができるまでかなりの年月がかかりました。シェアハウスやその他のプロジェクトがとても役に立ちました。

PL： 壁崩壊時はどのように過ごしていましたか。

MM： ちょうど壁が崩壊するとき、私は居酒屋にいて、テレビを見ていました。ベルリンでの状況がライブで写っていました。私は3時間ただただそこに居て、信じられませんでした。荷が下りたようなうれしい気持ちでした。数週間後、ベルリンに行き、何年も会っていなかった親戚や家族に会いました。なぜなら西側に政治犯として買われたとき、東ドイツから11年間の出国禁止令を受けていたからです。

ブランデンブルク門では約1時間の間に20回は東ドイツを出入国しました。東ドイツ国境に立つ国境警備隊ももう権威を失っていました。私の夢は叶えられたのです。もう東ドイツ人であっても、自由なのです。私の子供時代の思い出の東ドイツ、それが「清算される」時が来るとは、あの頃思いもしませんでした。

PL： 今、どんな仕事をしていますか。

MM： シュトゥットガルトの劇場で9年舞台技術をしています。19歳で学校をやめ、先を悩んでいたころから約40年後の今やっと到着することができました。今日誰かが「あなたは誰？」と聞いたなら、「世界で一番幸せな市民です」と答えるでしょう。満足しています。

PL： あなたに勇気があったから、すべてうまくいったのだと思われませんか？

MM： 勇気？強い言葉ですね。私は勇気がある、息しているから？私は勇気がある、私が好きなように生きているから？私はそれは頭が固く、独りよがりで生存本能が強いのだと思います。

PL： 何か他に読者に対して言っておきたいことがありますか？

MM： 本を読もう！たくさん読もう！一番いいのは近所の本屋で買ったような本です。そして簡単に中に書いてあるものを信じないで！自分でよく考えて！あなた方が決めることです！そして、「今からアイスを食べに行く」などのフェイスブックメールを送るのをやめてくれ！

現存のフランスの哲学者があなた方を「親指姫たち」と名付けています。なぜなら。。

現代、スマートフォンと親指ひとつですべての人間の知識、知恵というものにたどりつくことが可能な人類史上初めての世代だからです。地位や出生やモラルなどから完全に開放されています。とてもうらやましいです。あなた方はこれによって、大きな権力とすばらしい将来の展望を持つことができます。利用しない手はありません。

*興味のある方に/ 当時の裁判、判決資料、シュタージ書類の原本などが [www. Michelus.net](http://www.Michelus.net) で閲覧可能です。